



Title	東日本大震災からの復興を祈念して：「支縁のまちネットワーク」からの発信
Author(s)	宮本, 要太郎
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(2), p. 93-97
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/16081">https://doi.org/10.18910/16081</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 東日本大震災からの復興を祈念して

### ―「支縁のまちネットワーク」からの発信―

宮本 要太郎\*

MIYAMOTO Youtaro

#### 1. はじめに

2011年7月16日、大阪市西区にある立正佼成会大阪普門館において、支縁のまちネットワーク主催の「東日本大震災復興祈念集会」が開催された。この集会は、その名称に端的に示されているように、3月11日に発生した東日本大震災からの復興を祈り願う人びとの思いを結集する目的で開催された。周知のように、巨大な地震とそれによって引き起こされた大津波は、東日本の広範囲にわたって甚大な被害を及ぼした。被災状況が刻々と明らかになるにつれて、あまりの悲惨さに日本全国が沈痛な思いに包まれ、無力感にさいなまれたのである。「あの日」から数カ月経ても、何万何十万もの人たちがいまだ失意のどん底にあり、何千万もの人びとが哀悼の意に包まれている状況に大きな変化はない。

しかし、そのようななか、数多くの宗教団体や信仰者のグループが、被災地で、また全国各地で、救援活動や復興支援活動を立ち上げ、その活動は今日も続けられている。その献身的な努力は、単に物的支援だけでなく、精神的な支援へと展開しつつある。それは、寄り添うことで共に悲しみ共に苦しむ（コンパッション）という、本来宗教者が深くかかわってきた「支縁」の活動があらためて広く求められているということでもある。集会は、被災地をはじめ全国各地で行なわれている宗教者たちによる献身的な活動が、3.11後の日本社会において、確かな絆（きずな）や縁（えにし）で結ばれた人間性豊かなコミュニティの確かな復興につながることを確信し、さらにその「支縁」の輪が太く強く広がっていくことを願いとして開催されたのである。

---

\* 関西大学文学部・教授・mymt@kansai-u.ac.jp

当日は、立正佼成会をはじめ諸宗教からの参加者、報道関係者や研究者、さらに一般参加者も含め、400名近くが参集した。以下、集会の内容を報告するとともに、合わせて、集会を主催した「支縁のまちネットワーク」の活動についてもふれておきたい。

## 2. 集会のプログラム

### 2.1 講演

集会の第一部は、兵庫県立大学教授の岡田真美子氏による講演であった。岡田氏は環境人間学部に所属して「環境宗教学」や地域ネットワーク論を研究する一方で、NPO 法人千姫プロジェクト（理事長）やNPO 法人ひょうごまちづくり（理事）など、社会活動にも積極的にかかわってきている。

講演は、「無縁社会から結縁（けちえん）社会へ～復興のために合力を！」と題して行なわれ、大震災を経た今だからこそ、あらためて「無縁」の意味を問い直すとともに、過去と現代の支え合いネットワークについて考える必要性を訴えるものとなった。すなわち、昨今さかんに「無縁社会」ということが強調されているが、「無縁所」などの例が示すように、「無縁」には、硬直化し、しがらみ化した世俗の「縁」（タテ社会）をいったん断ち切って再出発するという、積極的な側面もある。そのようにして生まれた無縁空間において人びとは、講などの平等なネットワーク（ヨコ社会）を結成（結縁）していったのである。

現代社会は個人主義が広まっているが、「個」の尊重は「孤」の尊重ではない。日本の伝統社会には「結い」「手間替え」「舩い（もやい）」のように、地縁・血縁とは異なる独自の協働と助け合いの仕組みの知恵が存在する。それらは、例えば自殺死ゼロの旧海部町（徳島県）などに残る「朋輩組」（年齢階層別の相互扶助組織）のように、今日でも個を尊重しつつ共生することを可能にしている。この例も示すように、重要なのは、自立している人こそが共生できるということであり、自立するためには合力（ごうりき）が必要だということである。今こそ、復興のために、歴史の知恵も借りつつ「結縁」して合力することが求められている。

講演はわずか 60 分であったが、具体的な事例を織り交ぜながらの話は、きわめて啓発的であり、聴衆は深く感銘を受けている様子であった。

## 2.2 インド古典舞踊奉納

第二部は、「破壊から再生へ～破壊の女神カーリーに捧ぐ」と題して、花の宮祐三子氏により、インド古典舞踊のオディッシーが演じられた。花の宮氏からは、前もって次のようなメッセージが届けられていた。

今、地球は「破壊」という大きな流れの中において今回の震災もその一つの現れであると感じています。しかし、「破壊」があつての「再生」。私達の意識に大きな変革が迫られています。恨み、妬み、、、私自身も闇を直視し光をあて、皆様と「舞踊」の時空間を共有させていただきます。（後略）

破壊と再生、悲嘆と希望とが、表裏のものであることを全身全霊をもって表現する舞踊オディッシーは、まさに祈りの身体的表現の極致ともいえるものであった。

## 2.3 パネルディスカッション

休憩をはさんで第三部は、「「支え合いのまち」の再生をめざして」と題して、まず被災地における活動報告がなされた。日本基督教団牧師で宮城県宗教学法人連絡協議会の川上直哉氏からは仙台市の「心の相談室」について、立正佼成会教務局社会貢献グループ長の保科和司氏からは同教団の善友隊（援助隊）や「こころ ひとつに」プロジェクトについて、そして金光教大阪センターの竹内真治氏からは金光教大阪災害救援隊について、それぞれ活動の一端が紹介された。地元の多様なニーズに応えようとして取り組んでいる宗教者たちの被災地との関わりは、とても感動的で示唆に富むものであった。

続いて、川上氏、保科氏に、川浪剛氏（真宗大谷派僧侶・支縁のまちサンガ大阪代表・支縁のまちネットワーク共同代表）、橋本直之氏（天理教教師・旭都たすけあいネット事務局長）、および松浦悟郎氏（カトリック大阪大司教区補佐司教・大阪希望館共同代表）が加わり、渡辺順一氏（金光教教師・支縁のまちネットワーク共同代表）が司会となって、パネルディスカッションが行なわれた。ふだんから社会の第一線で信仰的な立場から活動を実践しているそれぞれの宗教者からの提言は、宗教性やスピリチ

ユアリティを足場にしながら、タテではなくヨコのネットワークを構築（結縁）することで街づくり・人づくりが創造されていく過程がうかがわれて、たいへん示唆的なものであった。また、パネリストの顔ぶれも、仏教、キリスト教、新宗教と多彩であり、宗教間対話としてもきわめて意義深かった。

### 3. おわりに―越境する「支縁のまちネットワーク」―

この報告を終えるにあたって、今回の集会を主催した「支縁のまちネットワーク」について簡単に説明しておきたい。この集まりは、ゆるやかなネットワーク組織の形態を取りながら、宗教施設（寺院、神社、教会など）や宗教者が関わるさまざまな「たすけあい」としての「支縁」の活動について、情報交換と連携（ネットワーキング）を行ない、また相互にエンパワーメントをはかることを目的として、2011年1月に発足したばかりの集いである<sup>(1)</sup>。

この組織の特徴は、第一に超宗派性（宗教間格差の越境）である。そのことは、パネリストの所属からも、また、協賛団体として「大阪市仏教青年会」「カトリック大阪司教区 社会活動センター・シナピス」「金光教大阪センター」「金光教平和活動センター」「浄土宗應典院」「新日本宗教団体連合会近畿総支部」「土生神社」が名を連ねていることから、窺われる。前述の川浪氏を中心にして2010年12月に結成されたばかりの「支縁のまちサング大阪」は、孤独死を迎えようとしている人びとに葬送支援や生前の「縁」づくりを行なうため、有志の仏教僧侶が宗派の違いを超えて結成したものであり、支縁のまちネットワークの中核的メンバーでもある。

第二の特徴は、超宗教性（「宗教」の枠からの越境）である。すなわち、このネットワークには、宗教者による活動だけでなく、非宗教的な組織とも積極的に連携し、協働していこうとする姿勢が見られる。今回の集会の協賛団体には「大阪希望館」運営協議会も含まれているが、この「大阪希望館」では、大阪労働者福祉協議会会長の山田保夫氏と前述の松浦氏が共同代表を務め、NPO 釜ヶ崎支援機構事務局長の沖野充彦氏が事務局長を、そして前述の渡辺氏が事務局次長を務めるという顔ぶれからも分かるよう

に、行政や労働組合や市民団体と宗教者がまさに一丸となって大阪のまちをセーフティネットにするべく取り組んでいる。この形態は、支縁のまちネットワークにも受け継がれている<sup>(2)</sup>。

第三の特徴として、宗教者と（宗教）研究者の連携ということを挙げたい。支縁のまちネットワークの定款には、その事業の一つとして、「学術的な調査研究の実施」が掲げられている<sup>(3)</sup>。また、共同代表を務める本稿報告者や事務局長を務める金子昭氏（天理大学おやさと研究所教授）は、「宗教研究者」であると同時に「宗教者」でもある<sup>(4)</sup>。それは渡辺氏も同様である。すなわち、ネットワークに参画している個々人において、活動それ自体が、「宗教研究」という営みに自明のものとされる研究の主体と客体という分割線を双方から「越境」する試みでもあるのである。今後の展開は、これからの「宗教研究」や「宗教者」のあり方に一石を投じるものとなるかもしれない。

## 註

- (1) 1月17日に正式に発足。5月28日に金光教大阪センターで開催された総会では、東京大学大学院教授の島藺進氏が「現代社会の困難と宗教の潜在力―地域社会の彼方から再び地域社会へ―」と題して設立記念講演を行なった。
- (2) 支縁のまちネットワークの会員は宗教者に限定されていない。
- (3) これ以外の事業として、「宗教者が関わる「支縁」活動の促進と開拓」「行政や他の民間団体との交流と協働」「総会・シンポジウム・各種研究会の開催」「インターネット、紙媒体を通じた広報」などが挙げられている。
- (4) さらに、ネットワークには現在5人の顧問が存在するが、秋田光彦氏（應典院代表）を除いて、上田紀行氏（東京工業大学教授）、鎌田東二氏（京都大学教授）、島藺進氏、および水内俊雄氏（大阪市立大学教授）の4名はいずれも研究者である。